戦国史の新論点

平成・令和の新研究から何がわかったか？

渡邊大門・編

論点1 揺れ動く大名の定義

論点2 鉄砲はいつ伝わったのか

論点3 松永久秀は梟雄ではない

論点4 信玄が実父を追放した理由は？

論点5 明智光秀は医師だったのか

論点6 山中鹿介は忠臣だったのか

一次史料に基づき、新説を検証する！

戦国時代の見方が変わる15の論点

SHINSHO

戦国史の新論点

平成・令和の新研究から何がわかったか？

渡邊大門・編

星海社

301

SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに

本書は、戦国時代研究の論争や新説を検証したものである。本書を紐解く前に、歴史研究で用いられる史料について述べておこう。歴史研究で重要なのは、一次史料と呼ばれる書状といった文書、日記などである。それらの史料は同時代に成立したものなので、内容が信頼できるとされ、歴史研究でメインに使われる。ただし、日記は伝聞による記事があるので、注意が必要である。いずれにしても、史料批判（史料の信憑性の確認）という手続きを踏まえて、研究で使用される点に注意すべきであろう。

二次史料とは、ある事件の終結後から数十年、数百年を経て、成立した史料である。軍記物語、系図、覚書などが該当する。その内容は千差万別で、かなり内容が正確なものもあれば、荒唐無稽な逸話集に過ぎない場合もある。織田信長の伝記『信長記』（太田牛一著）は記述内容に信頼が置けるが、それでも後世に成ったので二次史料である。

新しい説が提起され、またその新説をめぐって論争となる場合は、おおむね一次史料による裏付けを欠くことが多い。裏付けとなる一次史料があれば、別に問題にならないのだろう

が、どうしても一次史料を欠く場合は、二次史料を用いたりするので、その点をめぐって論争になってしまうのである。

たとえば、近年では、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦の直前、徳川家康が小山評定を開催したことが真偽をめぐって大論争になっている。論争になった大きな理由は、小山評定を催したことを示す決定的な一次史料がないからである。それゆえ、今も開催の真偽をめぐって、大論争が続いている。

近年では新説とはいいながらも、いわゆる「トンデモ説」が問題となっている。これまで、歴史研究のトレーニングを受けていない人が単なる思い付きで「トンデモ説」を提起することがあったが、近年では歴史研究のプロ（大学教授、学芸員など）でさえも驚くような説を唱えることがある。「トンデモ説」は、次のように分類できるだろう。

①単なる無知。
②信頼度の低い二次史料を用いることによる間違い。
③一次史料を用いていても、史料の内容を誤読する。
④牽強付会、大きな論理の飛躍。
⑤まったく根拠がない単なる妄想の類。

ほかにもあるかもしれないが、「トンデモ説」はこうしたことが原因で発生する（複数の要因が重なっているケースもある）。最近は、テレビの歴史番組が増えてきたが、おもしろおかしい「トンデモ説」に飛びついて失敗している例を見掛ける。一方で、「トンデモ説」を批判する歴史番組は皆無に等しいので、そのまま「トンデモ説」は何ら検証や批判がされることなく、世間の人々の間に広まっていくのである。

実は、歴史研究のトレーニングを受けていない読者にとって、史料の中身はブラックボックスである。たとえ、漢文を現代語訳または意訳しても、それが正しいのか判断できない。「こう書いてあります」と言われたら、とりあえず信用するしかないのである。そこに、もっともらしい論法で結論が示されると、「そうかもしれない」と思うに違いない。それが歴史研究のプロの発言ならば、完全に信じてしまうだろう。

本書は十五のテーマを掲げて、その検証に臨んだものである。それぞれのテーマは、古くから言われてきた誤謬もあれば、新説ではあるが間違っているケースもある。また、その説が間違いであることが判明しても、明確に結論が出ないものもあれば、さらに検討が必要なものもあろう。本書は各稿が独立しているので、どこから読んでいただいても結構である。ぜひ、読者の皆さんも一緒に考えていただきたいと思う。

目次

はじめに 3

論点1 「大名」論を問う 今岡典和 9

論点2 天文十二年に鉄砲が伝来したという説への疑問 長屋隆幸 27

論点3 松永久秀は足利義輝の殺害にかかわっていなかった 天野忠幸 45

論点4 武田信玄はなぜ父の信虎を追放したのか 須藤茂樹 61

論点5 明智光秀は医師だったのか 太田浩司 83

論点6 出雲尼子氏家臣の山中鹿介は忠臣だったのか 渡邊大門 105

論点7 織田信長と正親町天皇は対立していたのか 秦野裕介 125

論点8 三木城落城後、秀吉によるジェノサイドは行われたのか 金松誠 143
論点9 秀吉による中国大返しと「御座所システム」 渡邊大門 157
論点10 宗像才鶴女性説は正しいのか 花岡興史 173
論点11 千利休は切腹せず、生き長らえたのか 八尾嘉男 195
論点12 直江兼続は越後から年貢米を持ち去ったのか 田嶋悠佑 219
論点13 家康による前田利長の討伐計画は虚説なのか 水野伍貴 239
論点14 関ヶ原合戦の戦場は、「山中」か「関ヶ原」か 水野伍貴 259
論点15 戦国時代の蝦夷地は「日本」に含まれるのか 新藤透 275
おわりに 300

図版／ジェオ

論点2

天文十二年に鉄砲が伝来したという説への疑問

長屋隆幸

（ながや・たかゆき）
一九七二年山形県生まれ。愛知県立大学国際文化研究科博士後期課程単位取得満期退学。博士（国際文化）。現在、名城大学非常勤講師。
主要業績：『近世の軍事・軍団と郷士たち』（清文堂出版、二〇一五年）。『山内一豊・忠義』（ミネルヴァ書房、二〇二一年）など。

教科書に書かれた鉄砲伝来

火薬は遅くとも中国唐代（七～一〇世紀初頭）に発明された。宋代後期から元代（一三～一四世紀）には、竹や金属の筒に詰めた火薬を筒に空けた小さな穴に火種を差し込み爆発させて弾丸を発射する突火槍や火銃などと呼ばれる指火式の手銃や、現在の手榴弾に当たる震天雷など、火薬を用いた武器が発明され使用された。その後、ヨーロッパに火薬・手銃が伝わると手銃は改良され、銃床を持ち、引き金を引くと火縄が火薬を盛った火皿に落ち筒内の火薬を爆発させて弾丸を発射させる火縄銃が作られる（篠田：一九九二、長屋：二〇一六）。

日本では鎌倉時代の蒙古襲来で蒙古軍が使用した震天雷を「てつはう」と呼ぶなど、「鉄砲」は火縄銃が伝わるまでは火縄銃以外の火薬を使用した武器の名称に使われていた。火縄銃伝来以降は、銃床を持ち、引き金を引くと何らかの機構が作動して火薬が爆発し、弾丸が発射する武器の名称として専ら使用されるようになる（篠田：一九九二、長屋：二〇一六）。

ところで、日本に鉄砲（火縄銃）はいつ伝来したのか。その年代については天文十一（一五四二）年に種子島に伝わったとする説と、翌天文十二（一五四三）年に同島に伝わったとする説が存在する。この内、天文十二年説が長らく有力視されてきた。高等学校の日本史の教科書でも以前は天文十二年説が採られることが多かった。ところが近年、天文十二年説を採る教科書と天文十一年説を採る教科書とが混在するようになっている（関：二〇二一）。

例えば、『詳細日本史　改訂版　B』（山川出版社、二〇一八年）では「1543（天文12）年にポルトガル人を乗せた中国人倭寇の船が、九州南方の種子島に漂着した。これが日本にきた最初のヨーロッパ人である。島主の種子島時堯（ときたか）は、彼らのもっていた鉄砲を買い求め、家臣にその使用法と製造法を学ばせた。（中略）鉄砲は戦国大名のあいだに新鋭武器として急速に普及し、足軽鉄砲隊の登場は従来の騎馬戦を中心とする戦法をかえ、防御施設としての城の構造も変化させた」と天文十二年説を記し、天文十一年説については註で「1542（天文11）年とする説もある」と書くに止めている。

一方、『新日本史 改訂版　日本史B』（山川出版社、二〇一三年）には「ポルトガル人の交易は、初めは海禁政策をとる明から正式に認められなかったため、彼らは中国人密貿易商と組み、アジアの交易ルートに乗って日本に至った。鉄砲を伝えたとされるポルトガル人は、おそらく1542（天文11）年、シャム（タイ）から中国人密貿易商の王直の船に乗って種子島に着いたものとみられる」と天文十一年説を採用している。そして、天文十二年説については「1606（慶長11）年に種子島氏の依頼でまとめられた『鉄炮記』に拠って、これを1543（天文12）年のこととする説もある」と注記している。

このように近年の教科書では一応両説に触れるものの、天文十二年説を採用するものと、天文十一年説を採るものの二つが存在する。それではなぜこのような状況になっているので

あろうか。ここでは、その理由について紹介してゆくことにする。

天文十二年説の根拠『鉄炮記』

慶長十一年（一六〇六）に、種子島時堯の子久時が、父時堯の功績を称える目的で、禅僧・南浦文之（なんぽぶんし）（文之玄昌）に『鉄炮記』を著させた。これが天文十二年伝来説の根拠とされるものである。次に示すのは『鉄炮記』の概要を箇条書にてまとめたものである。

①大隅国の南十八里の位置に種子島という島があった。この島は種子島氏が先祖代々領有してきた島だと伝わる。種子島の名は小さな島であるが、住民がいて富んでいる様子が、蒔いた一粒の種の生命が窮まりがないのと同様であることにちなんでいる。

②天文癸卯秋八月二十五日、種子島の西之村の小浦にどこの国から来たかわからない大船が来航した。乗員は百人余で、見たこともない姿をしており、言葉も通ぜず奇っ怪に見えた。その中に五峯という明国の儒生がおり、彼とは筆談が可能であった。そこで、西之村の主宰であった織部丞（おりべのじょう）が、筆談で乗員達について問うてみたところ、船中の客は西南蛮種の賈胡（ここ）人とのことであった。異国船の漂着の報告をうけた種子島の領主であった種子島時堯は、小舟を数十隻出して漂着船を安全な場所に移動させた。

③八月二十七日、大船を赤尾木津に入港させた。同所には禅宗から法華宗に改宗した忠首座という人がいた。彼は五峯と筆談を通じて交際し知己となった。

④賈胡人の長二人の名は、牟良叔舎・喜利志多佗孟太といった。彼らは鉄砲（火縄銃）を携えていた。それは火薬を使って鉛の玉を打ち出すもので、心を落ち着かせ目を眇（すがめ）にして狙って撃てば、たちどころに命中し、その威力も強力であった。これを見た時堯は鉄砲を悪人退治や害獣退治などに有用な世の宝と見做した。なお、これを「鉄砲」と名付けたのは、明人なのか、種子島の住人なのかは不明である。

⑤時堯が賈胡人の長に撃ち方を習いたいと申し入れた。賈胡人は奥義の伝授を快諾した。

⑥重陽の節句の頃、時堯が試しに射撃をした所、素晴らしい威力であった。見ていた者達も最初は畏れたが、最後には学びたいと思うようになった。時堯は高価で支払いが厳しかったが文句も言わずに、鉄砲を二挺買い入れ、稽古に励んだ。また、火薬の作り方を家臣篠川小四郎に学ばせた。側近達も稽古に励み、百発百中の腕前となった。

⑦その頃、紀州根来（ねごろ）寺に杉坊（すぎのぼう）某公という人がいた。杉坊は時堯が鉄砲を手に入れたと聞いて鉄砲を求めてきた。時堯は、杉坊の心意気に感じ入り、津田監物丞を杉坊の下に遣わして鉄砲一挺を贈り、火薬調合法と射撃方法を伝えた。

⑧時堯は、職人に鉄砲の複製の作成を命じた。職人たちは姿形をほぼ複製することに成功

した。しかし、どうしても筒の底を塞ぐ方法（尾栓の作り方）がわからなかった。

⑨翌天文十三年、賈胡人が種子島に再び来航した。彼らの中に、幸い鉄匠（鍛冶）がいたので、時堯は金兵衛尉清定に命じ、筒の塞ぎ方を鉄匠から習わせた。その結果、ねじを切って筒底を塞ぐ方法を教えてもらった。その後、一年余りで数十挺の鉄砲が作られた。時堯の目的は鉄砲を戦争で使用することであった。家臣達は（戦争で使用するという）時堯の意向を汲み稽古し、百発百中の腕を持つ者が幾人もあらわれた。

⑩その後、和泉堺の橘屋又三郎という商人が種子島へやってきて、一・二年程滞在し、鉄砲の技術を学び、畿内とその近郊に技術を伝えた。又三郎は人々から鉄炮又と呼ばれた。

⑪天文十一年、翌十二年に明へ派遣された貢船の一つに乗り込んでいた種子島氏家臣松下五郎三郎が、明からの帰りに船が嵐に遭遇した結果、漂着先の伊豆国の人々へ鉄砲の技術を教えた。これが契機となり、関東にも鉄砲が広まった。

②の天文癸卯とは天文十二年のことである。また、賈胡人とあるのは、ポルトガル人のこと、五峯とは倭寇の頭目であった中国人王直のことである（清水：二〇〇六、伊川：二〇〇八）。

天文十一年説の根拠

このように鉄砲が伝来した地である種子島で作られた『鉄炮記』が天文十二年伝来説の根拠をなしている。それでは天文十一年説の根拠となる史料は何であろうか。こちらは、一五六三（永禄六）年にアントニオ・ガルヴァンが著した『新旧諸国発見記』（原題『Tratado dos Descobrimentos』）と一五四八（天文十七）年にガルシア・デ・エスカランテ・アルバラードがメキシコ副王に宛てた『ビーリャロボス艦隊報告』（エスカランテ報告と呼ばれることもある）といったポルトガル側の史料が説の中核となっている。

『新旧諸国発見記』は次のように記す。一五四二（天文十一）年にディオゴ・デ・フレイタスがカピタンを務める船がシャム国（現在のタイ）に停泊中、同船からアントニオ・ダ・モッタ、フランシスコ・ゼイモト、アントニオ・ペイショットの三人が脱走し、一艘のジャンク船に乗って明（現在の中国）のリャンポーへ向かった。しかし、その途中暴風雨に遭遇して沖へ流された。数日後に東の方三十二度の位置に島が見えた。これは古書に宝の島と語られている「ジャポンエス」だと思った。このように書かれている（伊川：二〇〇八）。

一方、『ビーリャロボス艦隊報告』には、エスカランテがディオゴ・デ・フレイタスからの伝聞情報であるとして、次のように記している。フレイタスがシャム国に船を停泊した際、レキオ人（琉球人）のジャンク船がやってきたので、これらの人々と知己を得た。その後、フ

レイタスと一緒にいたポルトガル人二人が明で商売をしようと思い一艘のジャンク船に乗り向かったが、途中で暴風雨に遭遇しレキオス（琉球）にある一島に漂着した。彼らはシャムで知己を得たレキオ人の仲介により島々の国王から手厚いもてなしをうけた後、食料を提供してもらい立ち去った。

彼らから話を聞いた別のポルトガル商人が、明のジャンク船に乗り前述の島に到着したが、上陸は許されず、持参した品物とその値段を書いた覚書の提出を命じられた。ポルトガル商人たちは言われた通りにした。商人たちは銀で支払いを受け取り、食料の提供を受けると、退去するよう命じられた（伊川：二〇〇八）。

『新旧諸国発見記』『ビーリャロボス艦隊報告』の記事は、フレイタスの船から離れた者の人数が違うなど多少差異はあるものの、共通する部分が多い。また、『鉄炮記』に記されたポルトガル人の名前とされる牟良叔舎と『新旧諸国発見記』のフランシスコ、（喜利志多）佗孟太とダ・モッタの音が似ている。

これらの理由から『鉄炮記』『新旧諸国発見記』『ビーリャロボス艦隊報告』の記述は、同一の事件、すなわちポルトガル人の種子島来航につき書かれたものと考えられている。天文十一年説はポルトガル側の史料の記述を正しいものとし、『鉄炮記』の記述の方が間違っているとの視点から唱えられている説と言って良いであろう（清水：二〇〇六、伊川：二〇〇八、村井：二〇一三）。

『鉄炮記』への批判

以上のように『鉄炮記』を根拠とする天文十二年説とポルトガル人側が残した史料を根拠とする天文十一年説があるわけだが、従来は『鉄炮記』が信頼され天文十二年説の方が通説であった。これは、『鉄炮記』に伝来年のみならず月日まで記されており、何か確実な根拠があったと評価されてきたからである。しかし、先述したように近年では天文十一年説を採用する教科書もでてくるなど状況に変化が見られる（清水：二〇〇一）。

この状況の変化は、清水紘一氏により『鉄炮記』の史料的性格についての研究が進んだことによる。清水氏によれば、『鉄炮記』はかなり史実が混錯しているという。一例をあげるならば、ポルトガル側の史料から種子島にやってきた船は、当時の日本人にとり見慣れたジャンク船で、乗員は大部分は明人であったろうと思われる。

だが、『鉄炮記』ではどこの国から来たか知れない大船が来航し、乗員も類を見ない姿で奇怪であると書くなどポルトガル船が種子島に来航したかのごとく書かれている。これは南蛮船が来航するようになる天文十五（一五四六）年以降の印象で書かれているからだと主張されている。この他、倭寇の王直が儒生とされイメージに違いがあることや、ポルトガル人の人名が初来航と二回目に来航した者の名前が混錯している可能性なども指摘している。

また、『鉄炮記』は主に白髪の老人が残した記録（清水氏は「老人記録」と命名）と古老から聞い

た伝承に依拠し著された種子島家を顕彰する書で、学問的な厳密さは二の次にされたとする。「老人記録」は『鉄炮記』の月日が書かれている部分（②～⑥部分）に利用されたと考えられる。だが、同書は種子島氏家臣の私的記録に過ぎず、かつ実際は後年に作成された可能性が高く、そこに記された年月日は無批判に信頼できないという。

さらに、延宝五（一六七七）年に編纂された『種子島家譜』（『種子島譜』）における天文十二年とその翌年の記述にも注目する。同書の天文十二年・十三年部分には大隅国の国人禰寝重長が種子島時堯の叔父時述と手を結び種子島に侵攻した事件の顚末と、ポルトガル人の初来航・再来航について記されている。

このことから、種子島では両事件が同一年におきたものと伝わっていたと推測する。その上で、種子島氏と禰寝氏間の争いの調停をおこなった島津貴久の事跡について書かれた『島津貴久記』では、禰寝氏の種子島侵攻は天文十一年におきたと書かれていることを指摘し、『種子島家譜』は間違いで、禰寝氏の侵攻とポルトガル人初来航は天文十一年であったと主張している。

最後に、先の『新旧諸国発見記』『ビーリャロボス艦隊報告』といったポルトガル側の史料についても問題はあるものの基本的には矛盾点は少なく信頼できるとし、ポルトガル人の種子島初来航を天文十一年だと結論づけている。

清水氏の他には村井章介氏も天文十一年説を支持している。村井氏はポルトガル側の史料に出て来る「レキオス」が種子島であるとの見解を示すと共に、ポルトガル側の史料の人物と『鉄炮記』に記された種子島に来航したポルトガル人を同一人物だと見做す。さらに一年前倒しに読めば『鉄炮記』の記述はポルトガル側の史料と矛盾が生じないので、天文十一年に鉄砲が伝来したと考えて支障がないとする（清水：二〇〇一、村井：二〇一三）。

天文十一年説への批判

天文十一年説への批判もある。まず、『鉄炮記』のポルトガル人の種子島来航と『新旧諸国発見記』『ビーリャロボス艦隊報告』の来航とは別物と考えるべきとの説がある。

例えば所荘吉氏は、『新旧諸国発見記』ではポルトガル人が到達した島の位置を「東の方三十二度」、すなわち北緯三十二度と記していることに注目する。この位置にあるのは種子島（種子島の位置は北緯三十度二十分）ではなく、当時南九州における交通・流通の要衝であった阿久根（現、鹿児島県阿久根市）であった。そこで、『新旧諸国発見記』に記されているポルトガル人は阿久根に漂着したのであり、種子島に来航した者とは別と考えるべきと唱えている（所：一九八六、二〇〇六、長屋：二〇一六）。

中島楽章氏は『新旧諸国発見記』では鉄砲について何らの記述もなく、ただ北緯三十二度

の土地に漂着したと書くのに対して、『鉄炮記』では種子島に来航して鉄砲を伝えたと書いており内容に差異が見られることから、両者は別の事件と考えられるとしている。さらに、『ビーリャロボス艦隊報告』でポルトガル人らが漂着した「レキオス」とは、通常は琉球を指す言葉なので、彼らは種子島ではなく、琉球に漂着したと考えるべきであると主張している（中島：二〇〇五、二〇〇九、長屋：二〇一六）。

ただし、天文十一年説を採る立場の研究からは、北緯三十二度は間違って記されたに過ぎない可能性や、ポルトガル人の認識では「レキオス」に種子島が含まれていた可能性があるとの反論がなされている（清水：二〇〇一、村井：二〇一三）。

『鉄炮記』が誤っているとの主張の根拠とされた『島津貴久記』『種子島家譜』の記述の信憑性について考察し、やはり天文十二年に鉄砲が伝来したと結論づけた橋本雄氏の研究もある。

それによれば、天文十一年に時堯とその父恵時とが対立し、時堯が禰寝氏を頼って種子島で謀叛をおこすも失敗し、禰寝氏は撤退した。恵時は島津貴久に味方して欲しいと願い出た。そこで、貴久は新納（にいろ）康久を屋久島に派遣した。種子島から屋久島に落ち延びた恵時は貴久に援軍派遣の返礼として屋久島を割譲すると申し出たが、貴久はこれを固辞し、屋久島から派遣した軍勢を撤退させ、種子島親子の仲裁をおこなった。その結果、恵時と時堯が和議を結んだ。『島津貴久記』にはこのように書かれているという。

一方、『種子島家譜』では、次のように記されているとする。天文十二年に恵時とその弟時述が対立し、時述が禰寝氏を味方に引き入れ種子島に侵攻してきた。恵時は屋久島に避難し、時堯が迎え撃ったが、後に和睦し屋久島を禰寝氏に割譲した。ほどなくして恵時により時述は殺害され、翌十三年に恵時・時堯は屋久島を攻め占拠した。

両書を比較すると、敵対している人物が『島津貴久記』では時堯と恵時、『種子島家譜』では時述と恵時・時堯親子の組みあわせとなり大きく違う。橋本氏は、これを同一の事件ではなく、それぞれ連続する二つの事件と見做すべきだと主張している。すなわち、『島津貴久記』に書かれた時堯による恵時への謀叛がまず天文十一年にあった。この時、おそらく時堯は時述と手を結んだ。島津貴久の仲介で親子が和睦すると、今度は時堯と時述との間で争いがおき時堯が勝利をおさめ、種子島内の秩序を回復した。実際はこのような経緯であったとする。

そして、時述を排除し正統性を手に入れた天文十二年こそが時堯にとって重要であったことや、時堯が謀叛をおこした汚名を着せないため、かつ和睦を仲介しながら内紛をおさめることに失敗した貴久の面子を守るために『種子島家譜』では天文十一年の時堯謀叛に関する記述を省いた可能性があると指摘する。それらを踏まえて鉄砲伝来を天文十二年とするのはなんら問題ないと結論づけている（橋本：二〇一六）。

鉄砲伝来の異説

以上のように天文十一年伝来説、十二年伝来説は共に批判されており、現状確証がない。両説とも二次史料に依拠しており決定打に欠けるのである。新たな一次史料かそれに類する信憑性を持つ二次史料が発見されない限り決着はつかないと考えられる。

ところで、天文十一年以前に日本に鉄砲が伝わっていたとする史料が残されている。幾つか紹介しておこう。例えば、『蔭涼軒日録』の文正元年（一四六六）七月二十八日条に京都を訪れた琉球の官人が、総門の外付近で「鉄放一両声」を放ち人々を驚かせたとある。また、李氏朝鮮の歴史書『朝鮮王朝実録』には、一四一八年頃に駐割官として対馬に赴任した朝鮮官吏李芸が「火砲」で迎えられたことや、李芸が賊倭（倭寇か）が持っていた中国製の手銃を鹵獲したこと、一五〇九年に倭船（日本船）が銃筒や長箭を持っていたことも書かれている。

相模の戦国大名北条氏について書かれた『北条五代記』には永正七（一五一〇）年に中国から鉄砲が伝わり、享禄元（一五二八）年に小田原在住の山伏が堺で珍しいと買い求め北条家に献上したと書かれている。また、江戸時代前期に旗本大久保忠教が著した『三河物語』では永正五（一五〇八）年（永正三年とも）に伊勢宗瑞（北条早雲）が三河国岩津城を攻めた際に鉄砲を使用したとある。これらの史料に出て来る鉄砲は、種子島に伝わった火縄銃ではなく、中国で使用された指火式の手銃を指すものと考えられる。これが本当ならば天文年間以前に手銃

が日本に伝わったと言えよう（洞：一九九一、長屋：二〇一六）。

ただし、『蔭涼軒日録』の「鉄放」は爆竹を指しているとの説がある。『朝鮮王朝実録』の記述については、朝鮮で中国の技術支援を受けて手銃が作成されるようになったのが丁度この頃なので、対馬がそれよりも早く手銃を運用していたとは考えにくいとの指摘がある。『北条五代記』『三河物語』については江戸時代に作成された史料であるため信憑性に問題がある。さらに、秀吉の朝鮮出兵時の戦利品以外、日本には遺物がないとの批判もある（所：一九七五、洞：一九九一、宇多川編：二〇〇七、長屋：二〇一六）。

種子島における伝来が、唯一の伝来ではなかったとの説もある。これは朝鮮の史料に一五四七（天文十六）年時点で倭寇達が日本人に兵器を与え（売却か）、火砲の扱い方を教授していると記されていることや、日本に現存する鉄砲が多種多様な名称・様式・口径・カラクリを持つことから、天文期に倭寇を含む外国人勢力によって分散波状的に幾つかの形状の鉄砲が西日本に伝えられたとする。そして、種子島に鉄砲が伝来したのは同時期に各地に見られた伝来の一つに過ぎないとする説である（宇田川編：二〇〇七、中島：二〇〇五、長屋：二〇一六）。

むろん、これについても批判が存在する。まず、多種多様な鉄砲については、全てが海外からもたらされたものではなく、後に砲術家が創意工夫して変異したものが少なくないとの指摘がある。また、種子島での伝来を数多くの伝来の一つとする点については、鉄砲の代名

詞に種子島が使用されることや、十三代将軍足利義輝が種子島時堯に南蛮人から相伝された火薬調合を教えるよう命じていることから種子島が鉄砲の有力ブランドとして存在したのは間違いないとされる。それ故に、種子島の鉄砲伝来の影響力は小さくはなかったとの反論がなされている（佐々木編：二〇〇三、村井：二〇一三、長屋：二〇一六）。

このように異説も幾つかあるが、これらもそれぞれ批判がなされており、どれも有力視できるものではない。したがって、現状では鉄砲（原始的な銃および火縄銃ともに）がいつ日本に伝来したか正確な時期を示すことはできないのである。

主要参考文献

伊川健二「鉄砲伝来の史料と論点（上・下）」（『鉄砲史研究』三六一号・三六二号、二〇〇八・九年）

宇多川武久編『鉄砲伝来の日本史　火縄銃からライフル銃まで』（吉川弘文館、二〇〇七年）

佐々木稔編『火縄銃の伝来と技術』（吉川弘文館、二〇〇三年）

篠田耕一『武器と防具　中国編』（新紀元社、一九九二年）

清水紘一『織豊政権とキリシタン――日欧交渉の起源と展開――』（岩田書院、二〇〇一年）

清水紘一「『鉄炮記』の基礎的研究」（『中央大学論集』二七号、二〇〇六年）

関周一「鉄砲伝来年」（『山川歴史ＰＲＥＳＳ』四、二〇二一年）

所荘吉「天文以前における鉄砲渡来の実否について」（『鉄砲史研究』六六号、一九七五年）

所荘吉「鉄砲伝来をめぐって――その正しい理解のために――」（井塚政義・飯田賢一監修、種子島開発総合センター編『鉄砲伝来前後――種子島をめぐる技術と文化――』、有斐閣、一九八六年）

所荘吉「再考　葡人の初来日と鉄砲伝来草稿」（『鉄砲史研究』三五五号、二〇〇六年）

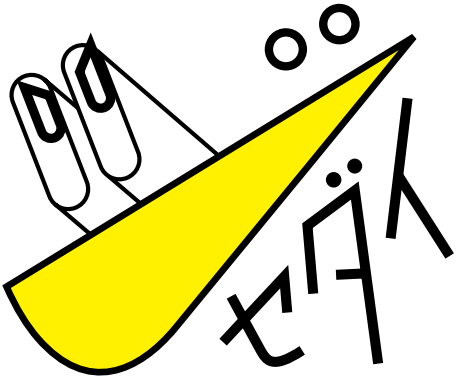
中島楽章「ポルトガル人の日本初来航と東アジア海域交易」（『史淵』一四二輯、二〇〇五年）

中島楽章「ポルトガル人日本初来航再論」（『史淵』一四六輯、二〇〇九年）

長屋隆幸「本当の鉄砲伝来はいつだったのか」（渡邊大門編『戦国史の俗説を覆す』、柏書房、二〇一六年）

橋本雄「『鉄炮伝来』と禰寝侵攻一件」（『日本歴史』八一八号、二〇一六年）

洞富雄『鉄砲　伝来とその影響』（思文閣出版、一九九一年）
村井章介『日本中世境界史論』（岩波書店、二〇一三年）



何と闘うか？

https://ji-sedai.jp

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント　著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！　行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研　若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み　既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!